

学位申請論文審査報告

藤川信夫氏博士学位申請論文審査報告書

日本大学法学部教授 藤川信夫氏は、2005年5月25日、その論文『コーポレート・ガバナンスの理論と実務—商法改正とその対応—』を早稲田大学大学院法学研究科に提出して、博士（法学）の学位を申請した。後記の委員は右研究科の委嘱を受け、この論文を審査してきたが、2007年5月8日、審査を終了したので、ここにその結果を報告する。

1 本論文の構成と内容（省略）**2 本論文の評価**

本論文は、おそらく平成17年会社法の成立前におけるもっとも詳細なコーポレート・ガバナンスの研究書である。全文936頁の浩瀚なもので、その圧倒的な分量に驚かされる。本論文の姉妹編ともいうべき別著『国際経営法学』（信山社、2007年）も実に828頁（本文600頁）の大著である。内容的にかなりの実質的重複がみられるとはいえ、なおコーポレート・ガバナンス研究としては最も包括的にして、最も丹念な研究書であることは否定できない。すなわち、本論文は、平成14年商法改正によって新しい委員会等設置会社制度と伝統的な監査役（会）設置会社との選択的採用が可能となった後、実際の経営機構改革の設計段階に入ったことを受けて、商法改正とコーポレート・ガバナンスに関する経営機構改革につき、具体的事例を踏まえ法的検討を試みるものである。その際、著者は、監査制度と内部統制システム、コンプライアンスとガバナンス、事業再生・新事業とガバナンスなどの新しい問題についても本格的検討を試みている。

以下、本論文の評価を行うものであるが、何分本論文は、扱う検討領域が広範であるばかりか、論述の分量があまりに多く、すべての問題を十分に採り上げることは難しいので、論点を絞って評価を行うものとする。

(1) 本論文の最大の長所はその包括性にある。本論文のテーマであるコーポレート・ガバナンスは現代社会の最大の課題の一つであるので、これに関する論文はおびただしい数に上る。とりわけ、企業社会においては、洋の東西を問わず、このテーマに関する事件が頻発していることは改めて指摘するまでもあるまい。わが国においても企業の不祥事の多発により、立法論的にも会社立法の最大の課題とされ、比較法的研究はもとより、事例研究も次々と発表され、そのすべてに目を通すことが困難なほどである。

そうした状況の下で、本論文はよくその全体像を把握し、著者なりの角度から検討を加えている。その努力だけでも評価に値するといわねばならないが、著者

はそれに加えて、たとえば、事業再生やベンチャー創出におけるガバナンスという学界でも未知に近い領域にまで踏みこんでいる。本論文が単に一つ一つの問題を丹念に追求しているだけにとどまらず、独自の問題領域の開拓を行っているところに、著者の研究者としての心意気を認めることができるといってよい。

(2) 加えて、本論文の大きな特色は、著者の実務家の経歴が本研究の上に大きく反映し、それが本論文の価値を高めている点である。著者の長年のフィールドワークともいうべき事例研究、とりわけ具体的な企業の事例研究は、コーポレート・ガバナンス研究にとって不可欠のものというべきであり、それが本研究の説得性を高めていることは明らかである。

とりわけ、具体的事例の類型化は、単に理論上の整理にとどまらず、コーポレート・ガバナンスの「生きた事例」を提示し、制度設計に大きなインパクトを与えるものである。その意味では、これは本論文のもっとも優れた一面を示しており、評価に値する。

(3) 本論文における比較法的研究は、とりわけ米国法と英国法に重点が置かれている。コーポレート・ガバナンスの母国ともいうべき国が米国であることからすれば当然のことであるが、著者はそれにとどまらず、独仏中韓のコーポレート・ガバナンスについても目配りを怠っていない。しかし、ここでは、米国法の研究が光る。

著者は、米国法との比較にもとづいてわが国のコーポレート・ガバナンスを論じ、数々の提言をしているが、それは大旨妥当といえる。しかし、著者はここでも一歩踏み出して、米国の「企業改革法」を含む最新の動向を研究し、米国の資本市場規制にまで検討を拡げ、そこから幾多の示唆を得ていることが本論文をダイナミックなものとした一因とも思われる。コーポレート・ガバナンスにおける資本市場規制の重要性を指摘することは一部の識者の間では常識であるとしても、こうした総合的研究においてそこまで研究を拡げて論ずる例は決して多くない。本論文が他の研究書と比べて比較的バランスのよさを感じさせるのはその点への論及があるからであり、評価に値する。

(4) コーポレート・ガバナンス研究は、主として法律学と経営学との両学問領域で研究対象とされる。本論文はそのことを意識して隣接学問分野にも十分な目配りを欠かしていない。

とりわけ、事例研究においては経営学の成果を十分踏まえており、事業部制からカンパニー制へ、さらに持株会社制への展開を背景に、コーポレート・ガバナンスのあり方を検討するなど、具体的事例の個別研究を通して、本研究に厚みと説得性を加えていることが本論文の一つの特色であることは先に述べたとおりであり、評価に値する。

(5) 最近のコーポレート・ガバナンスの研究では、内部統制システムやコンプライアンスに触れるのが常道であるが、本論文もそうである。しかし、著者の場合は、「触れる」のではなく、それらについて本格的な検討を加えている点に大きな違いがある。

現在、内部統制システムの構築は会社法上取締役等の法定義務化されている。本論文は、この点につき、米国の COSO 報告書の本格的検討から始まり、金融機関の内部統制システムの研究、とりわけその事例研究にまで及んでいる。著者の徹底した研究姿勢を示すものであり、評価に値する。

また、コンプライアンスの研究についても、量刑ガイドラインや企業倫理規定にまで踏み込み、事例研究を通してその実際の運用にまで及んでいる。これは著者の理論と実証の両立を目指す研究姿勢の好例といえる。

(6) 著者は、この大著を結ぶにあたって以下のように述べている。すなわち、「規制緩和の流れの中で、必ずしもこれ以上の法的規制が決して望ましいものでもない。コーポレート・ガバナンスの議論も、今後は法制度面から徐々に経営のあり方（定款自治）へと移行していくのであろうか。これまでの（日米）両国の経営風土の違い等も踏まえると、機構改革を選択制としたわが国商法の柔軟な制度は非常に合理的なものであるといえる。大切なのは形式論議に終始するのではなく、株主主権の原則に立って、個々の企業の実態に即して経営陣交替を求めうる透明性ある経営機構をいかに実効的に構築するかである」と。

この結論は、いわば現行会社法の基本原理を先取りしたものというべきである。いいかえれば、現行会社法は本論文の考え方を実証するものであり、評価に値する。

(7) このように本論文は、およそコーポレート・ガバナンスに関する問題という問題はすべて取りあげるといえる研究姿勢から、コーポレート・ガバナンスをきわめて多角的・包括的に研究するものであり、各個別問題につきそれぞれ詳細な検討を加えるとともに、持株会社から事業再生・新規事業創出に至るまでコーポレート・ガバナンスの新しい問題領域の開拓に努め、その総合的研究は、わが国のコーポレート・ガバナンス研究に貴重な貢献を与えるものである。

とはいえ、本論文を通観すると、疑問を感じるところが散見されるのみならず、なおこの研究に不十分と感じられるところがないわけでもない。その点を若干指摘しておきたい。いずれも理論上の疑問である。

第 1 に、これだけ膨大な研究になると、どうしても焦点がぼけてこざるをえない。たとえば、現在世間で流行ともいえるべき「CSR」は、CSR 特需といわれるほど各社がその取組みに熱中している。コーポレート・ガバナンスとどこで交錯し、どこで協働するかは、これからの大きな問題点の一つである。そう考えてみ

ると、これだけの総合的研究でありながら、その点に触れないでよいのか。否、むしろその点を検討することこそが、逆に、コーポレート・ガバナンスの本質を浮び上らせることになるのではないであろうか。

第2に、内部統制システムとガバナンス、コンプライアンスとガバナンスの理論的関連はどうであるか。せっかく、内部統制システムとコンプライアンスを論ずるのであれば、コーポレート・ガバナンスとそれぞれがどういう理論的位置関係にあるかを整序した上で論ずる必要があるのではないか。そうすれば、本論文の構成にもなんらかの影響があったように思われるからである。

第3に、著者の提示する理想のコーポレート・ガバナンスにしても、企業規模やコスト・ベネフィットの観点からの検討が必要ではないか、などの問題点がある。

本論文がこれまで発表されたコーポレート・ガバナンス関係の研究書では最も総合的なものであるだけに、最も体系的な研究書でもあって欲しいとの願いは決して的外れとは思えない。とはいえ、本論文に対してそこまで要望するのは明らかに望蜀のそしりを免れないであろう。それゆえ、本論文が分析し主張するところは、わが国の会社法学の発展にとって寄与するものと評価することができる。

3 結 論

以上の審査の結果、後記の委員は、本論文の提出者が、博士（法学・早稲田大学）の学位を受けるに値するものと認める。

2007年5月8日

審査員

主査 早稲田大学教授 法学博士（早稲田大学）	奥 島 孝 康
早稲田大学教授 博士（法学・早稲田大学）	上 村 達 男
早稲田大学教授	尾 崎 安 央
早稲田大学教授 博士（法学・神戸大学）	正 井 章 笹
早稲田大学教授	鳥 山 恭 一